

私立中学生の英語に対する学習意欲を支えるものは何か

— 自律的な動機づけに着目して —

学籍番号	229210
氏名	栗原 崇彰
大学院主指導教員	小松 孝至
大学院副指導教員	水野 治久

1. 背景

著者の勤務校（中高一貫男子校）では、生徒一人ひとりの学習到達度に合わせた指導をするため、コース制を導入している。具体的には、基礎学力の習得を目指すコース（以下Eコース）、基礎から応用までを網羅した授業を行うコース（以下Tコース）、発展的な授業を行うコース（以下Sコース）が設置されている。このコース制の課題の一つとして、コース間の学習意欲と（テストの結果としてのいわゆる）学力の差が年々拡大していることが挙げられる。成績が思うように上がらず希望のコースに行けないことにより、劣等感を抱いてしまったり、進路の可能性が何となく限定されているように感じてしまったりする生徒も少なからずいると思われる。そのような生徒は徐々に「勉強しないと親が怒るから」や「先生が宿題を出すから」といった自律性の低い外的動機づけ（速水, 2012）をもって学習するようになってしまう傾向があるのではないだろうか。基本的には、より自己決定の高い自律的動機づけをもつほど望ましい行動が導かれると考えられる（速水, 2012）。よって、生徒の他律的動機づけを、より自律的な動機づけに変化させていくことが大切であると思われる。

以上より、私立中学校に通う生徒の自律的な学習動機づけの状況を調査した上で、どのような授業のあり方が生徒の英語に対する学習意欲を高めうるかについて検討することにした。

2. 学習動機づけのスタイル等の調査

生徒の英語に対する考え方や意識、英語学習の動機づけを分析するため、学習動機づけのスタイル等のアンケート調査を行った。調査は2回にわたって実施し、1回目は2022年度の中学1年を、2回目は2023年度の中学全学年を対象とした。

1回目の調査では、中学校1年全体と各コースの学習動機づけは、自分にとって楽しくはないが大切なことだからやるといった「同一化的調整」レベルが最も高かった。また、英語に対する考え方・意識では、どのコースでも多くの生徒が、「英語は役に立つ」「英語で外国人と話せるようになりたい」「英語を話せることはかっこいい」と考えていることがわかった。また、多重比較（Holm法）の結果、Sコースが他のコースより自律性が高いと認められる有意差が7つの項目見られた。それらの有意差の中でも、EコースがSコースより低い差は5つであっ

た。このことから、SコースとEコースの自律性の高低差が大きいことが考えられた。

2回目の調査でも、全学年とコースの傾向として、「同一化的調整」のレベルで英語を学習している生徒が多く、また、英語に対する考え方・意識でも、やはり多くの生徒が、英語の有用性や英語で話すことの楽しさを感じていることがわかった。これは1回目の調査とほぼ同様の結果となった。

そして、この2回目の調査では、中学3年EコースとTコース（特にTコース）の自律性の低さが懸念された。内的調整の項目で、多重比較（Holm法）の結果、中学3年Tコースが他の学年・コースより低くなる有意差が散見された。特に、中学1年Tコースとの有意差が多く見られた。

一方、中学1年の中でも、Tコースは自律性が高く、中学3年Tコースと中学1年Tコースの差が顕著に見られた。また、中学2年Sコースと中学3年Sコースでは自律性の高さがうかがえたが、それと対比するかのように、中学1年Sコースの自律性の低さも見えた。このことから、同じコースでも学年によって自律性が大いに異なるということが示された。

3. 英語科教員へのインタビュー調査

中学1年Sコースと中学2・3年Sコースの自律性の高さの違いは、学年要因だけでなく、何かしらの教員の働きかけの要因もあるのではないかと考えた。そこで、中学2年Sコースや中学3年Sコースの授業担当者を含む3名の英語科教員へのインタビュー調査を行った。それぞれの英語科教員の具体的な語りから、「学ぶ楽しさ」「学習意欲を高める授業」「授業内外の仕掛け」「生徒への期待」という4つのカテゴリーごとに分析し、彼らの英語教育の実践や英語に対する考え方・意識を考察した。その結果、生徒の意識に教員の様々な働きかけが見られた。

4. まとめと今後の課題

アンケートやインタビュー調査を通して、生徒の英語学習の現状とニーズ、コース間の自律的な学習動機づけの高低差、そして「教員の働きかけ」による自律性の向上について考察した。生徒の学習意欲の減退を防ぎ、自律性を高めていくためには、生徒の興味関心や英語に対する考え方をくみ取り、それに応えながら指導することが必要であるということを再認識できる結果となった。

ただ、本研究には限界と問題点が3点ある。第1に、本研究において調査校が1校であった点である。本研究の結果については、勤務校独自の特徴を反映しただけの可能性は否めず、結果の一般化には慎重にならざるを得ない。同様のコース制を導入している調査校及びサンプル数を増やし、本研究結果の再現性を検討する必要があるだろう。

第2に、題目である「私立中学生」という言葉の意味に曖昧さがあるという点である。私立中学校といっても、コース制のない学校や大学の附属校と様々な形態がある。それらの学校で同様の結果が得られるかは定かではない。「男女別学と共学」、「コース制の有無」、「大学の附属であるか否か」といった形態に着目しながら私立中学校を分類し、それぞれの学校における実態についても検討する必要があると思われる。

第3に、インタビュー調査の研究協力者が3人に限られている点である。また、3人はみな、著者の勤務校（男子校）の教員である。そのため、女子校や共学校、コース制のない学校といった様々な学校の教員の語りには耳を傾けていない。他の私立学校における英語科教員の実践や意識については、今後検討していきたい。